

「群青デイズ」

作
ササキタツオ

《登場人物表》

青山玲菜（18） 高校3年生

緑川結衣（18） 高校3年生

白井理香（18） 高校3年生

《本編》

■第1場「恋の有効期限」……4月

○高校・屋上

4月の良く晴れた放課後。

あくびをしている青山玲菜（18）。

その隣で単語帳をめくっている緑川結衣（18）。

玲菜、結衣の脇腹を人差し指でつつく。

結衣、無視する。

玲菜、さらに結衣の脇腹をつつく。

結衣、ついに我慢できなくなって。

結衣「（ちよつと怒って）玲菜！」

玲菜「（甘えて）結衣。なんかしよー」

結衣「勉強」

玲菜「屋上に来てまで、わざわざ勉強しなくてもよくない？」

伸びをする玲菜。

結衣「一分一秒で差がつくんだよ？ 勉強！」

単語帳をめくる結衣。

玲菜「高3？ 降参だっつーの」

結衣「え？」

玲菜「高3だけに、参ったーって」

結衣「全然面白くないから」

単語帳をめくる結衣。

玲菜「大学？ 受験？ でもでも。まだ4月じゃん。1年も先の事なんて、頑張って取り組めないよー」

結衣「いざ本番でいきなり本気出せるワケないんだから。ちゃんと今の内から基礎を固めておくのが大事」

玲菜「先生かっ！」

結衣「勉強。勉強。私らも高3になったんだから。4月。ってことは、受験まであと1年ないわけだし！ 残された時間はあと僅か。玲菜、わかってないよね？」

玲菜「(非常に面倒くさそうに) えーっ……わかっていなくないことはない」

結衣「どっち？」

玲菜「あそぼー」

結衣「勉強、勉強！」

玲菜「どこもかしこもそればかりじゃん！ ああ。もう。うるさいうるさい、
って感じだよね」

結衣「いつまでも逃げられないよ」

玲菜「ああ……私は受験より、恋愛に合格したいっす！」

結衣「え？」

玲菜「恋だよ、恋！ 恋愛合格！」

結衣「また言ってるの？」

玲菜「いま新展開を迎えております」

結衣「ふーん」

玲菜「気になるでしょ？ でしょ？」

結衣「(仕方ないという感じで) 今度は誰？」

玲菜「よくぞ聞いてくれました。サッカー部の3年エースの皆川君！」

結衣「は？ またイケメン系？ やめとけ」

玲菜「いいじゃん！ イケメン！ ナイスイケメン！」

結衣「それ、絶対、顔面偏差値基準にして選んでるでしょ……」

玲菜「カッコ悪くて困ることはあっても、カッコ良くて困ることはない！」

結衣「なにその判断」

玲菜「私の恋愛理論ですよ！」

結衣「玲菜。それ当たったことあるの？ 今までの彼氏候補だってみんな顔で選ん

だから失敗したんじゃないの？」

玲菜「ぐさーっ(と死んだふり)」

結衣「(呆れて) で？ 告白するの？ しないの？ どっちなの？」

玲菜「(起き上がった) あ。結衣さんー。作戦、聞いてくれますか!？」
結衣「もう、仕方ない……」

単語帳をしまう結衣。

大げさに咳払いをする玲菜。

玲菜「サッカー部の練習は、放課後の6時まで。その帰り道、あとをつけまして、皆川君が部活の仲間とわかれたところを、スーツと通りかかったふりをして私が登場! 一気に告白して! シュート! ゴール!」

結衣「いや、そんなうまくいくか? ってか、ただのストーカーだし……怖い」
玲菜「そこは恋の隠密行動と言っておくれよ」

結衣「そもそも玲菜、皆川君の帰り道知ってるの? 気づかれずに、あとなんてつけるなんて難しくない?」

玲菜「そこは、私たちが協力してやるんですよ!」

結衣「え? 私たち?」

玲菜「結衣と理香と私の三人で」

結衣「えーっ。パス!」

玲菜「なんで?」

結衣「結果のわかっている告白を応援するのに時間を割くほど暇じゃない」

玲菜「結果なんてわかんないじゃん」

結衣「今の作戦だと100%フラれるのがオチ」

玲菜「どうして!? 完璧な作戦じゃん」

結衣「玲菜。皆川君と話したことある？」

玲菜「ある」

結衣「ちゃんとだよ？」

玲菜「あ……る？」

結衣「ないでしょ？」

玲菜「それはそうですけれども……」

結衣「で、いきなり登場して告白でしょ？ キモいって思われて撃沈する姿が目に見える」

玲菜「そんなこと言わないで。結衣、お願いだよー手伝っておくれよー結衣さーん」

そこへペットボトルを二本抱えた理香がやってくる。

理香「何じゃれあつてんの？」

玲菜「理香！ おそいー！」

理香「自販機、屋上から超遠いんだから。仕方ないでしょ。文句言うなら、あげないぞ」

玲菜「ジャンケン負けたくせに……」

理香「だからちゃんと買ってきたでしょ？ それとも、玲菜はいらなのかな！？」

玲菜「く、ください……！」

機嫌悪そうな理香、そっぽを向く。

結衣「まあまあ、自販機ジャンケンに恨みつこナシってことじゃん」

理香「(ずっと機嫌を直して) まあねー」

理香、玲菜と結衣に飲み物を配る。

玲菜「サンキュー」

結衣「ありがと」

理香「どういたしまして」

蓋を開けて飲む三人。

理香「それで、作戦の打ち合わせは進んだ？」

玲菜「それが、結衣が協力してくれないって」

理香「え？　なんで？」

玲菜と理香が結衣を見る。

結衣「だって……。理香、ちゃんと説明聞いた？」

理香「聞いたよ」

結衣「だったら……」

理香「アレでしょ。サッカー部の皆川君に突撃告白して、フラれるから、私たちが慰め会をしてほしいっていう相談でしょ？」

結衣「え？」

理香「違うの？」

理香、玲菜を見る。

頭を抱える玲菜。

玲菜「ちがーう！ 全然違うよ、理香！ 私、まずフラれないし！」

理香「え？ でも、さっき絶対フラれちゃうと思うんだよねーだから慰め会、結衣とやってよーって」

玲菜「それは、確かに言ったけど。リスクマネジメントといますか」

理香「まあ、いい加減、恋人欲しいって焦る気持ちもわかるけどさあ」

玲菜「でしょ！ だから二人に応援して欲しいの！」

結衣「私、やっぱ、パスで」

玲菜「えー」

結衣「だって。よりによって皆川君でしょ？ 私、2年の時同じクラスだったけど、

なんかノリ軽くて胡散臭い人って印象なんだよね。だから全然応援する気にもなれないって言うか……」

理香「まあ玲菜のタイプは、そういう軽い感じでよくいる『イケメン彼氏』的なのが理想なんじゃない？」

結衣「それはね……趣味の問題だけど」

理香「まあね……」

玲菜「ちよっと待って！」

理香「なにになに？」

結衣「ん？」

玲菜「その話、聞き捨てならない！ 私は本気で恋しているの！ 1年の時の、佐藤君だって鈴木君だって、2年の時の渡辺君だって！ みんな本気で好きになつたから告白して……フラれたわけだけでも！」

結衣「それはわかっているよ。だから玲菜にはもっと相手を選んで欲しいなって」

理香「確かに、今回は無理矢理感あるよね」

玲菜「二人してなんなんだ！ 華の高校生活もうちらにはあと1年しかないんだ

よ！ 青春の、恋の有効期限も切れちゃうんだよ！？」

結衣「恋は、いつでもできるんじゃない？」

理香「そうだよ」

玲菜「え？ 私がおかしいの？ 二人は彼氏欲しくないの？ 自分の青春のパート

ナー的な！ 高校時代、この瞬間は一回しかないんだよ！？」

結衣「私は勉強あるし……玲菜と理香がいればいいかな」

理香「私も。秋の大会で怪我するまで部活一筋だったから、そういうのはよくわか

んないな。っていうか毎日自分のやりたいことやってればよくない？」

玲菜「なんてことだ！ 恋をしたいのは私だけだったのかーっ！」

腰に手を当て、飲み物を一気に飲む玲菜。

いい飲みっぷりである。

玲菜を見守る、理香と結衣。

飲み終わる玲菜。

玲菜「わかりました。もう二人には相談しません！」

理香と結衣「え？」

玲菜「私は、今日、一人で、皆川君に突撃し、告白してきます！」

理香「やめときなっつて」

結衣「そうだよ……」

玲菜「じゃあ、どうしたら私の願いは叶うの？ 私、可愛くないし、運動もイマイ

チだし、勉強だってイマイチだし、何の取り柄もないし、誰にも好きになっつても
らっつたことないし、告白されたことだっつて一度もないんだから！」

理香「お、落ち着いて……。わかつた！ 協力する。ね！？」

結衣「う、うん……。サポートするからさ」

玲菜「……ホント？」

理香「あとで沢山泣こう！」

結衣「それで、喉がかれるまでカラオケ行こ。私は勉強するけど」

玲菜「二人とも……！」

玲菜、結衣と理香にハグをする。

玲菜「ありがとう！ 勇気百倍だ！ もういま、告白してくるよ！」

理香と結衣「え？ いま！？」

玲菜「祈つてて！ 恋の合格証書もらつて来るから！」

玲菜、勢いよく、去る。

理香「あ……行っちゃった」

結衣「全く……玲菜らしいな……。あのポジティブな行動力、時々羨ましい」

理香「確かに。時々暴走するけどね」

結衣「うちら、どうする……？」

理香「そうだな。慰め会の準備しよっか……？」

結衣「だね……！」

青空を仰ぐ理香と結衣。

■第2場「失恋ダッシュ！」……5月

○高校・屋上

5月の、体育祭の最中である。

ジャージの玲菜が息を切らしてやってくる。

玲菜「……なんなの！ ホントなんなの！ ああっ！ 許せない！」

大の字になって寝転がる玲菜。

ジャージの結衣がやってくる。

結衣「玲菜！ やっぱりここにいた！」

玲菜を引きずり起こす結衣。

玲菜「結衣……」

結衣「何やってんの？ 行くよ？」

玲菜「イヤだ……」

結衣「もう。突然いなくなるからビックリしたしさあ」

玲菜「(反対を向く)……」

結衣「(周りこんで)リレー、出よ」

玲菜「(反対を向く)……」

結衣「どうしちゃったの？」

玲菜「……」

結衣「お昼終わった頃からだよ。様子変だし」

玲菜「(何かを言いかけるが呑み込む)……」

ジャージの理香がやってくる。

理香「なんだ。やっぱりここかー。ホント玲菜、何かあると屋上に逃げて来るよね」

玲菜「理香……」

理香「敵前逃亡なんて許さないぞ。もう時間ないんだから。リレー、行くよ！」

玲菜「……」

理香「玲菜！ 青組の逆転優勝がかかっている、最後のクラス対抗リレーだよ！ この燃えるシチュエーション！」

玲菜「……私、出ない！」

理香「え？」

結衣「玲菜……」

玲菜「私、出れない！」

理香「何？ どうしちゃったわけ？ 足怪我した？ わけでもないよね？」

結衣「もしかして、皆川君？」

玲菜「(ドキリと結衣を見て)……」

理香「皆川がどうしたの？」

結衣「そうなんだ……」

理香「ちよつと！ なに？ え？ 二人、喧嘩でもしたとか？」

玲菜「……」

理香「リレーの順番だって、玲菜の次、皆川君になってさ、楽しみにしてたじゃん、彼氏にバトン渡せるなんてこの上ない幸せだ、最高だ、って！」

玲菜「私、バトン、渡せない……渡したくない！」

理香「はあ！？ こんな大事な時にさあ。喧嘩なら、体育祭終わってからにしてよ」

玲菜「……別れてなかったのっ！」

結衣「え？」

理香「どういうこと？」

玲菜「前の彼女と皆川君、別れてなかったの」

結衣・理香「えーっ!？」

玲菜「っていうか、私とは遊びだったって、さっき言われた……。お昼休みに」

理香「はあ！？ それマジ！？」

結衣「だから、お昼からずっと様子おかしかつたんだ……」

理香「それ、ホントなの？」

玲菜「私とは、ずっと遊びで付き合ってたんだって。友達ともネタになるからとかで」

結衣「ひどい……」

理香「皆川っ！」

理香、飛び出していく。

結衣「あ。理香！」

玲菜「……そういうことだから。もう放っておいて」

結衣「でも。玲菜。みんな待ってるんだよ」

玲菜「そんなの……誰かが二回走ればそれで済むじゃん！」

結衣「それはそうかもしれないけど……」

玲菜「だから私はいいの！」

結衣「……いまの玲菜、最低だよ」

玲菜「え？」

結衣「恋愛は、個人的な問題でしょ？ 個人的なことでもクラス全体に迷惑かけるの

は、違うと思うよ」

玲菜「……正論だね」

結衣「じゃあ！」

玲菜「正論過ぎて、正直、ウザい」

結衣「玲菜……」

玲菜「割り切って笑顔で皆川君にバトン渡せっていうの？ そんなの無理！ できないよ！ もう目が合うのだってイヤだし、手が触れるかもしれないのだってイヤなの！」

結衣「……」

玲菜「初めての彼氏だったのに……私の」

しばらく間。

理香が息を切らして戻って来る。

理香「玲菜！」

結衣「理香」

理香「行こう。私は玲菜と走りたい！」

結衣「私も！」

玲菜「……」

理香「それと、皆川、ぶん殴ったから！」

結衣「えーっ!？」

玲菜「……」

理香「少しは反省しろってんだ！」

玲菜「理香……」

理香「だから、戻ろ！ うちの最後の体育祭、青組の優勝で終わらせよ！」

玲菜「……なんでそんなこと！」

理香「え？」

玲菜「……」

理香「皆川、殴った事？」

玲菜「……そうだよ。なんでそんな……」

理香「だって……」

玲菜「余計なお世話なんだよ。迷惑なんだよ！」

理香「余計なお世話？ 迷惑かけてんのはどっちだよ！ 玲菜だろ！？」

玲菜「私が迷惑なら放っておけばいいでしょ！」

理香「放っておけないから！ 大変なんでしょ！」

結衣「ちよっと二人とも……」

理香「皆川はね、笑ったんだ。玲菜が悪いって。玲菜がアホだって。だから、私許せなくて、殴った。それだけ」

玲菜「理香……」

理香「迷惑だったかな？ 余計なお世話なのかな……」

首を横に振る、玲菜。

理香「順番も変えるから、玲菜、一緒に走ろ！」

玲菜「……。そ、そ……それは、やっぱ無理だよ！」

理香「なんで？ このまま逃げたらもつとヤバイよ？ 皆川じゃなくて、玲菜が責められるんだよ？ 後悔するよ？ どうしよもなくなるよ？」

玲菜「でも。無理なものは無理！」

結衣「わかった。それなら、私が2回走る！」

玲菜「え？ 結衣が？」

理香「それはダメ！」

結衣「え？ なんで？」

理香「結衣はクラスでもダントツに遅いじゃん！ それより玲菜だよ！」

結衣「私がいると迷惑なの！？」

理香「とにかく玲菜！ 走ろ！」

玲菜「クラスと私とどっちだ大事なの！？」

理香「勝負だよ！」

玲菜「もういい！」

結衣「私も！ 走らない！」

理香「え？ 結衣？」

結衣「私が走るとクラスのみんなに迷惑かけるんだね……わかったよ。私も走らない！」

理香「いや。さっきのは……」

結衣「理香。言ったよね。私は必要ないって。だから、走りません！」

理香「そうは言っていないよ」

結衣「勝負なんでしょ？ 私の代わりに誰かが二回走った方がいいよ！ 私は棄権します！」

理香「結衣……。わかった。それなら……私もやめる！ 棄権する！」

結衣「え？」

玲菜「いやいや。理香は走りなよ。一番体育祭、楽しみにしてたんだし」

結衣「そうだよ。楽しみにしてたじゃん」

理香「三人で走れないなら。勝っても意味ないし。三人でボイコットしよう！」

玲菜、その場に座る。

となりに結衣が座る。

その隣に理香が座る。

理香「クラスの誰かがなんとかするでしょ」

結衣「だよね」

玲菜「だね」

結衣「あとでみんなに責められるね」

玲菜「だよね。めっちゃ恨まれるんだろうな」

理香「まあ、悪いのは皆川ってことで」

結衣「イケメン男子も終わりだ」

玲菜「理香。さっきは言い過ぎた。皆川君、殴ってくれて、ありがとう」

理香「お安い御用だよ」

玲菜「短い、恋でございました」

理香「今度こそ、いい相手探せよな」

玲菜「うん……理香。結衣。わかったよ」

理香・結衣「え？」

玲菜「私、わかった！」

理香「何が？」

玲菜「ちよつとワガママだった。まだ間に合うよね！？ 走りに行こう！」

結衣「え？ いいの？」

理香「無理しなくていいんだよ？」

玲菜「無理はする。泣くかもしれない。でも後悔はしたくない。三人でリレーサボった思い出もいいけど、私は三人でリレー勝った思い出にしたい！」

立ち上がり、手を取りあう三人。

玲菜「じゃあ、行きますか」

結衣「遅くても頑張るから」

玲菜「失恋ダツシュ！ 行くぞ！」

結衣・理香「おう！」

三人、一緒に去る。

■第3場「雨の日は傘をさして」……6月

○高校・屋上

6月。しとしとと雨が降っている。

傘を持った玲菜がやってきて、空を仰ぎ、傘をさして立つ。

少しして、傘を持った理香がやってくる。

理香と玲菜、視線が合う。

視線を逸らし合う二人。

理香、玲菜とは反対側の空を仰ぎ、傘をさして立つ。

玲菜「……何。屋上で傘？」

理香「そっちこそ、何？」

玲菜「こっちの質問」

理香「別に」

玲菜「あっそ！」

沈黙。

玲菜「(探るように) 結衣？」

理香「そっちも……？」

玲菜「そうなんだ……」

理香「そういうことか……」

玲菜「なるほどね……」

玲菜と理香、帰ろうとして、向かい合い、そのままにらみ合う形。

傘を持った結衣がやってくる。

結衣「あ」

玲菜「結衣……」

理香「どういうこと？」

結衣「……二人、話せた？」

玲菜「は？」

理香「話す必要ないってさ！」

玲菜「こっちのセリフだし！」

傘をさして玲菜と理香の間に入る結衣。

結衣「まあまあ……」

玲菜「だいたい結衣さ。私にだけ、大事な話があるって、言ったよね？」

結衣「そう、だね……」

理香「私にも折り入って話がしたいから。って言ったよね？」

結衣「まあ、ね……」

玲菜「こんなことだろうとは思ってたけど」

結衣「私は二人に仲直りして欲しくて」

理香「悪いのは、玲菜だから」

玲菜「悪いのは、理香でしょ」

結衣「まあまあ。もうどっちが悪いとか。いいじゃん」

玲菜「よくない」

理香「そうだ。よくない」

玲菜「ああ、また話してしまった。二度と、理香と話さないって決めたのに！」

理香「私だって、玲菜とは話さないって決めたのに！」

結衣「二人とも。仲直りだよ」

玲菜・理香「イヤ！」

結衣「……」

玲菜「結衣。伝えて。大体、理香が抜け駆けしたことが許せない。って」

結衣「(理香に)玲菜は、理香が抜け駆けしたことがまだ許せないんだって……」

理香「そんなことしてないし。っていうか、玲菜に伝えて。勉強もろくにしないで

赤点だったのは自己責任でしょ？ って」

結衣「(玲菜に)勉強しなかったのは自分のせいなんじゃないのかな、って理香が」

玲菜「はあ！？ 誰が好きで赤点とるんですか？ そんな人間がいますか!？」

理香「……(結衣を呼んで)自分で望んでないのに赤点しかとれないなんて可哀想

ですね！ って」

結衣「玲菜……」

玲菜「何？」

結衣「その……」

玲菜「ってか、聞こえてたし！ (結衣越しに)自分だけやればできる子みたいな

顔しないでもらえますか？ 私だって本気出せば、赤点回避くらいできます！」

理香「(イラっとして)そんなこと言って実際無理なクセに！ 本気出す、なんて言

う奴に限ってたいしたことないんだよ、その本気！」

玲菜「ああっ！ 許せない！」

理香「痛いところつかれたからって、人のせいにするのやめてもらえます？ 自己

責任！」

玲菜「そうやってバカにされるのが一番傷つくんだから！」

理香「バカバカバカバーカ！」

結衣「ちよ、ちよっと……二人とも……仲直り……」

玲菜・理香「はあっ！？ 誰がこいつと！」

結衣「……」

玲菜「大体、結衣さ、この状況で間を取り持つとか、無理なんだよ」

理香「あー。そうやってまた人のせいにする！」

玲菜「してないし！」

理香「いましたじゃん。結衣の優しさに付け込んでさ！」

玲菜「そもそもは理香だし！ この裏切り者！」

理香「勉強に裏切りもなにもありません！」

結衣「それはそうかも……」

玲菜「結衣はいいよ。いつもクラスでもトップ・キープなわけだし。優秀最高！ で

も、理香は許せない！ ついこの間まで赤点世界の常連だったんだよ！ こっち

側の人間だったんだよ！ それなのにその態度の急変！ 人間って怖いねー」

理香「時代は動いていくんだよ、玲菜！ 私ら受験生だってこと、忘れすぎ！」

結衣「理香。でも。玲菜は勉強頑張ってもできないタイプなんだから……」

理香「それはそっか！」

玲菜「はあ！？ はあ！？ はああっ！？ 今度は二人して、私のこと、お見下し

になられるんですか！？ そういう態度でございますですか！？」

結衣「見下してなんてないよ……」

理香「変な日本語」

玲菜「それが見下してる、っーの！ 超スゲー上からだし！」

理香「(あざ笑うかのように) でも頑張ってもできないんでしょ？」

玲菜「私は頑張ることを頑張ってるだけ！」

理香「(わけわからないと言っ感じ) なにそれ。今回の件で言うなら、明らかに、その頑張らないことを頑張りもしない玲菜が悪いよ。私が赤点同盟を裏切ったとかわけのわからないこと言うのは見当違いだし！」

玲菜「……私だけ。私だけ置いてけぼりかよ！ じゃあ、なんで理香は勉強してることに私に教えてくれなかったの？」

理香「はい！？」

玲菜「普通、試験勉強始めたら、『今日は勉強あるから遊べないね』とかあるじゃん。

でも理香、普通にテスト前も私と遊んでたじゃん！」

理香「それはそういうもんでしょ！」

玲菜「え？」

理香「努力って、他人が見えないところですから意味があるんだよ。『私頑張ってるよ！』なんて言う、あからさまに見せびらかすようなイタいヤツにはなりたくない」

玲菜「でも。私には言ってくれてもいいじゃんかー」

理香「でも。玲菜って、頑張ってるよーってアピールしたい人じゃん？」

玲菜「はあ！？ そんなことないし！ 私はイタくないし！」

理香「結衣だって、勉強していること自慢とかしないじゃん？ これが世間のスタンダードなのわかってないんだよ。勉強は、肃々と自分との戦いだから」

玲菜「結衣はそれが当たり前前っていうか……そういうキャラだからいいの！」

理香「キャラの問題！？ 私がダメなわけは？ わけわかんない！」

玲菜「……抜け駆けみたいになるのは、理香らしくないじゃん！ズルいつていうか」

理香「私のこと、羨ましいんだ！」

玲菜「それはそうだろ！誰も好きで赤点とりたいわけじゃないし！」

結衣「それくらいにしようよ……。もう十分だよ……」

玲菜・理香「結衣は黙ってて！」

結衣「……黙ってて、って何？」

玲菜・理香「え？」

結衣「ふざけんな！人が気を遣ってるのがわからないの!？」

玲菜・理香「……」

結衣「もういい！私、二人が仲直りできればいいと思って！喧嘩するために、二人を呼んだんじゃない！2人とも何もわかってない！私、帰るっ！」

結衣、傘をその場にたたきつけて、去る……。

玲菜と理香の間に沈黙……。

玲菜「ああ、あつ……。怒らせた……」

理香「そっちが悪い……」

玲菜「そっちも悪い……」

沈黙。

玲菜「私ら、何やってんだろ」

理香「確かに……」

玲菜「ごめん……できないヤツで」

理香「私こそ、ゴメン……色々言ってる」

玲菜「今度は私も頑張ってみる」

手を差し出す玲菜。

理香「一緒にがんばろ」

その手をとる理香。

そこへ戻って来る結衣。

思わず、手をはなす玲菜と理香。

玲菜と理香を見る結衣。

結衣「傘、忘れた」

玲菜「えっ……」

理香「ああ……」

結衣「(空を仰いで)ん？ あ、雨、止んだ」

空を仰ぐ結衣。

それに合わせて、玲菜と理香も空を仰ぐ。

晴れ間の日差しが三人にさして……。

■第4場「夏雲に描く夢と恋」……8月
○高校・屋上

8月の昼下がり。

灼熱の日差し。ゼミの声。

だらりと座っている玲菜。

玲菜「あぢい……」

ペットボトルの水を飲む。

玲菜「ぬりい……」

やってくる理香。

理香「あちい……だりい……」

玲菜「おっ」

理香「おっ」

理香もだらりと玲菜の隣に座る。

理香「なんなんだろうね、この暑さ」

玲菜「異常気象」

理香「だね。だりい……」

玲菜「冷房も壊れてるしさあ。ホント最悪」

理香「え？ マジ！？」

玲菜「そっちは平気？」

理香「まあ。無事かな」

玲菜「マジか！？ 灼熱地獄はうちのクラスだけですか？ そうなんですか？ マ

ジ最悪だー存在ごと溶けて消えたいわー」

理香「可哀想に」

玲菜「勉強も嫌だしさ。受験も嫌だしさ。せめて涼しい教室で受けたいわけですよ。

夏期講習うちのグループだけ不公平じゃん！」

理香「まあ、他に空き教室ないからねえ」

玲菜「残酷な現実っ！」

理香「午後も頑張るしかないね」

玲菜「マジ死ぬ！ つてか、こんな暑さじゃ全然内容入ってこないし。意味ないよ、

なんなんだ夏期講習！」

理香「でも、玲菜、一人じゃ勉強しない派じゃん。いい機会じゃない？」

玲菜「まあ。だからちゃんと参加しているわけですけどね！それにしても、先生たち無駄に気合入ってるのどうかと思わない？」

理香「今年は東大生をうちの学校から出すんだとか、言ってるけど、それはさすがに無理でしょ？」

玲菜「ってかその目標をできる子にだけ言うなら、まだわかるけど、生徒みんなに押し付けないで欲しいよね」

理香「そう！それそれ！各々の目標があるんですから。なんかやたら難しい問題出されても解けないっの！」

玲菜「先生たちもこの暑さで頭おかしくなってるのかな？」

理香「かもねー」

玲菜「理香はすっかり受験生モードだよね」

理香「私、新しい目標見つけたから」

玲菜「目標？」

理香「私、世界探検家になるの！」

玲菜「え？」

理香「この前、冒険家のドキュメンタリー番組見てすごいカッコいいなって！」

玲菜「それで？ 大学受験？」

理香「まずは英語ができないとね。それに国際的教養も必要だってその人が言ったから！」

玲菜「マジか！？ 具体的目標ができると、エンジンかかるよね、理香は」

理香「だから。この夏期講習で遅れを取り戻したいって思ってる」

玲菜「すごいな。私なんて、基礎の復習からだもんなあ、未だに目標も定まらず…
…ああ、疲れる……」

理香「玲菜は恋を我慢しているだけ、偉いよ。今のうちにしっかり休も！」

「だらりとする玲菜と理香。」

そこへ結衣がやってくる。なんだかそわそわしている。

玲菜「(結衣に気づいて) ん？ 結衣！」

結衣「ああ、お疲れ！」

理香「お疲れー」

玲菜「勉強できる子クラスはみっちりコースですか？」

結衣「う、うん……」

理香「結衣、なんかあった？」

結衣「え？」

理香「今朝から、様子おかしいような？」

玲菜「暑いからじゃないの？ さすがの結衣もオーバーヒートのな？」

結衣「そ。そうかも。暑いからね……」

玲菜「え。冗談なんですけど。マジでどうした？」

結衣「……」

理香「うちらには言えないこと？」

玲菜「わかった！ 恋だ！ 恋！」

理香「いやいや。結衣は恋より勉強だし。なんでも恋愛と結び付ける癖、よくない

ぞ」

玲菜「ですよー！」

結衣「実は……私、告白された！」

玲菜「え？」

理香「マジ！？」

玲菜「え？ どここの誰！？ 誰、誰よ！？」

理香「玲菜、落ち着いて！」

結衣「図書委員の青柳君。昨日の、帰り道。たまたま一緒になったら、告白された」

玲菜「マジか！？ 秀才コンビ！？」

理香「青柳君も大人しそうに見えて思い切ったことするなあ」

結衣「でも。それだけじゃないの！」

玲菜・理香「え？」

結衣「今朝。野球部の大谷君からも告白された……大会終わったら告白しようと思

ってたって……ずっと好きだったって」

玲菜「マジですか！？ あの野球部イケメン枠の大谷君でございますか？ 超いい

じゃん！」

理香「いきなり結衣の時代が来たわけか……」

結衣「ねえ。どうしたらいいと思う？ 私、こんな経験したことなくて。とりあえ

ず、待ってもらったことにはしたんだけど……二人ならどうする……？」

玲菜「私は大谷君だな！」

結衣「イケメンだから？」

玲菜「野球部。真面目。精悍。性格もいいだろうし。結衣を守ってくれるタイプな

んじゃないかなーって」

結衣「なるほど……」

理香「私は青柳君だな。結衣には同じような目標を持って頑張れる仲間みたいな彼氏が似合うよ。青柳君となら、切磋琢磨できる関係が築けるんじゃないかな？」

結衣「なるほど……」

玲菜「え？ どうするの？ どうするの！？」

理香「玲菜、落ち着け」

結衣「う、うん……でもなんか恋愛って私の世界観ではピンと来なくて……」

玲菜「そりゃ、手つないでデートして、一杯喋ってキスするんだよ！」

理香「それ、実体験皆無だよね？」

玲菜「私の憧れを語ったままで。大チャンスなんだから。付き合ったらいいよ」

結衣「でも、私。選ぶなんて。そんなことできない……」

玲菜「えーっ」

理香「いや。わかる。私だったら選べない」

結衣「理香……」

理香「これは難しい。両方とも優良株なもの」

玲菜「落ち着いて考えよ。二人とも断らないっていうのは！？」

結衣「え？」

理香「は？」

玲菜「だから。二人と同時に付き合ってみて、いい方を残す的な！」

理香「それ、二股！」

結衣「そうだよ……」

玲菜「でも。付き合ってみないと実際わからないわけだし。合理的な判断だと思うけどなあ」

理香「玲菜のは、ただ羨ましいだけでしょ」

玲菜「私は失恋マスターとして、マジでアドバイスしているのです！」

理香「妙な説得力があるところが怖い！」

結衣「でも。私、恋愛なんてしてたら、勉強できなくなるんじゃないかって……」

理香「だったら。もう青柳君で決まりじゃない？」

玲菜「そんなことない。スポーツマンの頑張りを甘くみてはいけない！ 大谷君は

私と同じレベルのクラスだけど、超真面目に講習うけてるよ！ きっとみんなを

ごぼう抜きするタイプだよ！」

結衣「迷うよ……どっちと付き合うか、付き合うのが正解か、それとも断るか。も

っとわかんなくなっちゃった……」

玲菜「……結衣」

理香「そうだよね……はじめてこんな状況になったら苦しいよね」

玲菜「わかった。私が二人とも引き受けよう！」

理香「意味わかんないこと言わない！」

玲菜「ごめん！」

結衣「私。自分が不器用なの知ってるし。こんな自分を受け入れてくれる人がいる

のか不安で……」

玲菜「何言ってるの！ ウチらがいるじゃん！」

理香「そうだよ。私たちはどんな時でも結衣の決断を応援するよ！」

結衣「うん……わかった。私。やっぱり断る。恋愛は私にはまだ早いと思うし。今

は目標に向かう大事な時期だから」

玲菜「そっか……！ 恋の大チャンスだが、仕方ない！」

理香「よく言った！ 結衣！」

結衣「ありがと！ 私、ちゃんと断って来る！」

結衣、去る。

チャイムが鳴る。

理香「あ、もう午後開始じゃん！」

玲菜「理香……」

理香「ん？」

玲菜「私もいつか誰かに愛されるかな？」

理香「何言ってるの。玲菜らしくいればいい人が現れるって。行くよ！」

玲菜「うん……！」

玲菜と理香、去る。

■第5場「秋の距離」……10月。

○高校・屋上（夕）

10月。文化祭。夕暮れ。

バンドの演奏が遠くに聞こえる。

玲菜と理香がいる。

理香はぶつぶつ英単語帳をやっている。

玲菜「理香！ 理香さーん！」

理香「ん？」

玲菜「今日くらい。いいじゃん」

理香「え？」

玲菜「勉強」

理香「ああ……ダメ」

玲菜「えー。いいじゃん。文化祭なんだよ。この2日間だけでも解放されようよ」

理香「そんなこと言って毎日解放されてたら、あつという間に受験になっちゃうよ」

玲菜「ここから見えると、すごい人ごみだよ。たこ焼き、たい焼き、チョコバナナ

……」

理香「食べ物ばっかじゃん」

玲菜「そうかもだけど……。つまんなーい！ 楽しみたーい！ なんで屋上で勉強

会なんてしないといけないの!？」

理香「楽しむには苦しむことが必要だ」

玲菜「え？」

理香「バイ、冒険家！」

玲菜「何それ」

理香「名言集。辛い時はそれみて元気出す。マイブーム」

玲菜「理香は強いよな」

結衣「もう十分見たよ」

理香「私も」

玲菜「えー。高校時代最後の文化祭ですよ、みなさん！そこ重要では？」

結衣「まあ、こんなもんじゃない？」

理香「そうそう」

玲菜「なんだよー二人とも真面目取っちゃってさあ。そもそも結衣が告白されたの断ったりするからうちの誰も恋人いないんじゃない！」

結衣「あ、うん……」

玲菜「ん？」

結衣「それが、実は先月、また告白されて」

理香「結衣、モテるなー」

玲菜「え！？今度は誰！？」

結衣「二人の知らない、違う高校の人。塾が一緒に……付き合ってみることした」

玲菜「えーっ！？」

理香「そんな驚かなくても」

玲菜「いやいや。驚くでしょ。衝撃でしょ。ディープ・インパクトですよ！」

結衣「今まで黙っててゴメン……！」

玲菜「いいけどさ。彼氏いたんだ……」

理香「私も。彼氏できた」

玲菜「ええええええっ！？」

理香「私もできたらダメ？」

玲菜「い、いや……。でも、理香はこっち側にいてくれると思ってたのにー」

理香「なんだそれ」

結衣「本当なの？」

理香「うん。同じクラスの木村君。なんか気が合うから。付き合ってみることにした」

玲菜「え！？ 理香はいつからなの！？」

理香「昨日、かな」

玲菜「まさかの文化祭告白でありますか！？」

理香「そう、だね」

玲菜「うわー。私の理想を叶えやがって！ この幸せ者があー！」

理香「あ、ありがとう」

玲菜「なんだ。うまくいってないの、私だけかよ。そりゃ、二人とも文化祭に興味もなく、勉強できるわけですよ」

理香「そんなことないけど」

結衣「そうだよ」

玲菜「去年だったら、私が有志でお芝居やってて、理香は部活の売り子さんで、結衣は勉強してたけど。うちら、輝いてた……。今年は灰色だ……。灰色だよ……」

理香「玲菜はホントのところどうなの？」

結衣「それ聞きたい」

玲菜「え？」

理香「最近、騒がないところを見ると、いい感じの人いるのかなって思ってたけど？」

玲菜「それは……」

結衣「いるの？」

玲菜「彼氏はいません。でも気になっている人はいます」

理香「新たな恋ですか！？」

玲菜「うん……。夏期講習でグループが一緒だった、星野君。塾もおんなじで、話すようになって……。でもまだ全然！　そういう感じじゃないっていうか」

理香「玲菜にしては珍しい」

結衣「突撃しないの？」

玲菜「突撃したいけど。私もちょっとは成長したっていうか。いまは相手の心を探っている時期っていうか。今度の恋は慎重に行く必要があるっていうか」

理香「へえー」

結衣「へえー」

玲菜「なににに！？」

理香「恋、してるならよかった。じゃないと、玲菜じゃないからな」

玲菜「文化祭、つか二人は彼氏と何かしないの？」

結衣「え？」

理香「んー」

玲菜「マジか！？　なにもしないのか？　そういうものか！？」

結衣「私は違う高校だから」

理香「私は別にそういう馴れ合いとかいいかなって」

玲菜「結衣はともなく、理香の彼氏は絶対遠慮してるよ」

理香「そうかな？」

玲菜「だって理香だよ」

理香「どういうこと？」

玲菜「マイペースというか。オンリーワンペースと違いますか。合わせるより合わせさせるタイプじゃん」

理香「そんなことないよ。ただお互い約束しなかっただけ」

玲菜「意外と向うは待ってるかもよ」

結衣「確かに」

理香「結衣もそう思う？」

結衣「うん」

理香「そうか……。いや。確かに誘われはしたんだよね。でも勉強会するからって断ったからさあ」

玲菜「えー！？なぜ断る！？」

理香「だって、もう三人で集まること決まってたし」

玲菜「付き合い始め、初日でしょ！？きつと向うは、色々この文化祭で距離を詰めようと考えているわけですよ」

結衣「男子の気持ちがよくわかるね」

玲菜「連戦連敗の経験が語っているのです！」

理香「なんか妙な説得力」

玲菜「連絡したらいいよ」

理香「でも……」

結衣「遠慮することないよ。連絡して。最後の文化祭なんだし」

理香「そうか……。そういうものか」

理香、スマホでメッセージを打つ。

理香「送信しました！」

玲菜「なんて？」

理香「今から会う？」

玲菜「シンプル！」

結衣「でもなんかキュンときそう」

理香「あ、返事きた。体育館で吹奏楽部の演奏聴きに行かないか？ だつて」

結衣「いいじゃん」

玲菜「いいーじゃん！」

理香「えーでも……」

玲菜「行ってこい！」

理香「また戻って来るから。二人とも帰らないでよ！？ いてよ！？ いい！？」

玲菜「はいはい。報告楽しみにしてます」

結衣「行ってらっしゃーい」

理香「行ってくるかー」

理香、去る。

玲菜「理香の彼氏、完全に待ってたね」

結衣「だね」

玲菜「ああ、いいな私もアタックしたくなるけど……」

結衣「我慢？」

玲菜「今回は、できるだけ自分ではいかないと決めたのです」

結衣「彼氏ができて、うちらは変わらないから」

玲菜「結衣……」

結衣「泣いたり、笑ったり。分かち合うのが友達だから」

体育館からクラシックの演奏が聞こえて来る。

結衣「あ。吹奏楽部の演奏かな？」

玲菜「青春が流れてますな」

結衣「ですな」

■第6場「終わりの季節」……12月

○高校・屋上（夕）

冬の夕暮れ。12月。

玲菜、チラシを見ている。

理香、がやってくる。

理香「おっす。玲菜」

玲菜「理香。遅い」

理香「ごめん。彼との打ち合わせが長びいちゃって！」

玲菜「いいよね、彼氏」

理香「またそれ言う。で？ 相談って？」

玲菜「結衣が来たら」

理香「そうだね」

玲菜「12月だね」

理香「2学期も終わるね」

玲菜「だね……終わりの季節ってなんか寂しいよね」

理香「まあね」

玲菜「年明けの初詣は三人で行けるかな？」

理香「それは難しいんじゃない？最後の追い込み入るでしょ？受験生にお正月

なんてない！ってどこもかしこも言ってるし」

玲菜「まあね。私も年明けからずーっと塾だもんなあ！」

理香「来年になったら、もうほとんど学校にも来なくていいしね。……なんか変な

感じ」

玲菜「面倒な授業もう受けなくていいんだって思うとハッピーだけど」

理香「悲観的かと思ったら急に楽観的！」

玲菜「まあ、卒業式まで生き残れるか。そこが勝負どころだけだね」

理香「受験の結果もその頃には出てるもんね」

玲菜「なんか信じられないよ」

理香「何が？」

玲菜「この前、3年生になったばかりだった気がしたのに。時間ってあつという

間じゃない？」

理香「確かに……」

玲菜「ああ、考えないようにしてたのにー」

理香「いいじゃん。いろんなことあったし」

玲菜「でもでも。あの時ああしていれば、とか思うわけですよ。大学、今の私のレ

ベルではいいところは望めないのですよ。ある意味、絶望なのですよ。もつと頑

張っておけよ過去の自分って思うわけですよ」

理香「後悔先に立たず！ 玲菜はスタートが遅かったし、スパートかけるタイプじゃないからね。親は？ 浪人も視野に入れてる？」

玲菜「うわ。浪人って言葉うちでは禁句なの！ 『女の子は、浪人すると就職口なくなるから、入れるところはいいればいい』って」

理香「えー時代錯誤！」

玲菜「大学は、就職口かよって！」

理香「まあ。親はそんな感じあるよね」

玲菜「だから余計に絶望なのですよ。私は青春後悔しまくりです」

理香「こんどは悲観的か!？」

玲菜「理香はすごいよね。成績もうなぎのぼり！ 有名私大も射程圏内なんですよ？」

理香「まあ……ね……」

玲菜「え？ なになに？ 実は、もっと上狙ってるのか？」

理香「まあ、希望っていうか、目標は高く持たないと、モチベーション保てないし。

最後まで頑張るしかないって」

玲菜「そ、そうだよね……」

理香「玲菜も。頑張るんでしょ？」

玲菜「もちろん！」

理香「終わったらみんなで遊びに行こうね」

玲菜「うん……。なんか結衣、遅いね……」

理香「ああ、先生にさっき呼ばれてたから。もう少しかかるのかも」

玲菜「……私さ」

理香「ん？」

玲菜「色々ラストチャンスだと思っただよね」

理香「え？ ここから本題？」

玲菜「うん……割と本題」

と、玲菜、チラシを理香に見せる。

理香「これ……クリスマス？」

玲菜「そう」

理香「もしかして例の好きな男子に？」

玲菜「そうです！」

理香「マジか！？ それで悩んでいたの？」

玲菜「そうですよ。悪いですか？」

理香「いやいやマジ脳内キャパもったいないっていうか、今、この時期に考える事じゃないよ。クリスマスプレゼントで悩むなんて！」

玲菜「えーそんなことないよ。お互いこの寒い中受験頑張れるようなグッズ何がいいかなーって考えるのどこがダメなの！」

理香「ダメだよ！ 恋愛モードじゃ、戦いに生き残れない！ 自分で決めてたじゃん。恋愛禁止って！」

玲菜「どこのアイドルだよ！」

そこへ結衣がやってくる。

結衣「え？ 二人とも何言いあってるの？」

理香「結衣、聞いてよ。っていうか見てよ。このチラシ」

理香、結衣にチラシを渡す。

結衣「これ……私たちがクリスマスやることにしてたっけ？」

玲菜「違う！」

結衣「え？ どういうこと？」

理香「玲菜、この期におよんで、まだ恋愛しようとしているのです」

結衣「ああっ！ 好きな人へのプレゼント！」

玲菜「結衣。何がいいと思う？ この時期だから手袋かな？ マフラーかな？ それじゃありきたりかな？」

結衣「えーっ……」

玲菜「理香も考えてよ。彼氏のいる二人に聞きたいわけですよ。恋愛の先輩になるわけでしょ！？」

理香「急に持ち上げてもダメだから」

玲菜「えーっ」

理香「私はそういう馴れ合い？ しないことにしてるし。ドライな関係だから」

結衣「それに仮にも受験生だしね！ プレゼントなんて（語気強く）意味ない！」

玲菜「え？」

理香「ん？」

結衣「あ……」

玲菜「意味ないことはなくない？」

理香「そうそう。ただタイミングが悪いっていうか。結衣、何かあった？」

結衣「ない、けど……」

玲菜「嘘だ！ 嘘だ嘘だー！」

理香「結衣のことだから……なんだろ。模試のA判定がB判定になったとか!？」

結衣「そんなことはないけど……」

玲菜「じゃあ、何だ？ やっぱり恋愛だろ！ 彼氏だろ！ 教えなさい！」

結衣「……」

理香「そんなに責めたら、言い出しにくくなるじゃん！」

玲菜「あ。ゴメン」

結衣「ううん。いいの。実は……彼とはお別れすることにしたの」

玲菜「え？」

理香「うまくいったんじゃないの？」

結衣「うまくは行ってたと思う。でも自分でも思った以上に、なんていうのかな。

邪魔なんだよね」

玲菜「え？ 邪魔！？ 彼氏が邪魔!？」

結衣「自分の気持ち……。なんかこの大事な時期なのに、勉強手につかなくなっ

たりするの……ため息ばかりとか……」

玲菜「それ、ほ、本気の恋!」

結衣「ホント、頭の中ゴチャゴチャしてくるの……だから。お別れするって決めた

の」

玲菜「いやいやいや。わけわかんないよ！ 本気で恋しているんだよ？ なのにお

別れ。意味わかんない!」

理香「いや。わかるな……」

結衣「理香……」

理香「本気になったからこそ、距離を置きたい、って気持ち。私の恋はまだそこま
でじゃない、っていうか、始めから本気にならないって決めてるっていうか。で
も結衣は真面目だから。恋にも真剣になっちゃうんだよ。だから苦しくなる、息
が抜けないんだよ」

玲菜「嘘だあ！？好きだったら距離を置きたいなんて思わないよ。むしろずっと
近くにいたいって思うよ！」

結衣「それだと、私がダメになっちゃうの。だから」

理香「そっか……」

結衣「うん……」

玲菜「そんなああああああ！そんなんじや、これから先だって恋愛できないじ
ゃん！」

結衣「ごめん。私の話はいいんだ」

玲菜「……私の話も、もういいよ」

結衣「でも、チラシ……」

玲菜、結衣からチラシを受け取る。

玲菜「二人は私が想像できないほど、先へ進んでしまったって事がわかったから！」

玲菜、チラシを鞆にしまう。

玲菜「私は、一人で切り開くよ……だから大丈夫！」

結衣「玲菜」

玲菜「みんな大変なのに、私、ひとり能天気な悩みでゴメンね！」
結衣「ううん……」

チャイムの音が遠くに聞こえる。

三人を静かな沈黙が包む。

玲菜「そろそろ。帰ろうか」

理香「だね」

玲菜、一足先に去る。

結衣、理香、お互いを見て。

理香「帰ろうか」

結衣「うん……」

玲菜が戻って来る。

玲菜「遅いぞっ！ みんなで帰ろ！」

結衣と理香、玲菜を見て、駆け寄って。
三人、去る。

■第7場「卒業」……3月
○高校・屋上

卒業式の終わった、あと。

玲菜、卒業証書の筒を持って、青空を見上げる……。

理香と結衣がチョークの箱を持ってやってくる。

結衣「チョーク、持ってきたよ」

理香「集めるの大変だったんだから」

玲菜「よーし！」

結衣「本当に書くの？ 普通、こういうのって、黒板に書かない？」

玲菜「いいのいいの。のびのびと私らの屋上に書き残そう！」

結衣「でも消えちゃわない？」

玲菜「それがいいんじゃない！」

理香「どうということ？」

玲菜、空を見上げる。

理香「ん？ どうした？」

玲菜「飛行機雲！」

理香「え？（見上げて）あ。ホントだ」

結衣「ん？（と見上げて）あー」

三人で飛行機雲をしばらく眺める。

玲菜「卒業。しちゃったね……」

結衣「だね……」

理香「（空に向かって）おめでとーっ！」

笑いあう三人。

玲菜「なんかあつという間だったね……3年間って」

結衣「だね」

理香「でも。私たちの人生はこれからも続いていくのです！」

玲菜「例の冒険家の言葉？」

理香「私語録。作ろうかな、と思って」

結衣「理香らしい」

玲菜「ああ、みんなは先に進むからいいよね」

結衣「玲菜だって」

理香「そうだよ。まさか。親の反対押し切って、浪人するって決めるとはね！」

玲菜「だって。友達二人が、いい大学行って私だけ、誰でも入れるところって、妥協するみたいな人生の選択は、やっぱり嫌だもん。妥協はイヤ。それに。好きな

人も浪人するしね！一緒に勉強頑張るんだ！」

理香「恋は勉強にも強し、か！」

結衣「玲菜。証明してよね。私にはできなかったから……」

玲菜「好きな気持ち残ってるなら、もう一度付き合おうとかは？」

結衣「ないない。私、きつとあの時は勉強から逃げたくて、無理やり恋しようとしていたんだと思う……」

理香「結果、恋を捨てて、勉強と向き合った」

結衣「それが正解だったかはわかんないけど。結果的に、スタートラインに立ててよかったって思ってる」

理香「私も冒険家と同じ大学入れたからどんどん外国行って見聞広めるんだ！」

玲菜「新しい春ですな！みなさん！」

結衣「だね」

理香「そうですねあ！」

玲菜「よし！チョーク、チョーク！」

各々、チョークを取り出して、床面に思い思いの言葉を書いていく……。

そして、書き終える三人。

結衣「GOOD DAYS！」

理香「スタートライン！」

玲菜「さよなら青春！」

それぞれの書いた文字を改めて、見る三人。

玲菜「いいね」

結衣「いい」

理香「最高だな」

玲菜「3年間、ありがとう」

結衣「楽しかったね」

理香「何言ってるの！ これからもウチらは続くじゃん！」

玲菜「だね！」

結衣「もちろん！」

玲菜「それにしてもよく書けたなあ！」

理香「自画自賛？ でも、いい感じ」

結衣「それじゃあ、写真撮ろう」

玲菜「よし」

スマホを出し、落書きを背にする三人。

玲菜・結衣・理香「卒業。おめでと！」

写真を撮る3人。
笑顔。

理香「じゃあ、行きますか」

結衣「うん」

玲菜「よっし！」

理香、去る。

結衣、去る。

玲菜、去ろうとするが、駆け戻ってきて……。

玲菜「(大声で力の限り) さようならっー！」

叫び終わる玲菜、呼吸を整えて、空を見る。

理香の声「何、叫んでるの？」

結衣の声「行くよー」

玲菜「うん！」

玲菜、去る。

屋上には、3人の落書きだけが、残る。

【終】